



TITLE:

会話における演技に関する会話分析的 研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

臼田, 泰如

CITATION:

臼田, 泰如. 会話における演技に関する会話分析的研究. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22084>

RIGHT:

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	臼田 泰如
論文題目	会話における演技に関する会話分析的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、会話で観察される演技（enactment）という振る舞いを記述し、その理論的意義を論じることを目的としている。全体は6章から構成される。</p> <p>第1章では分析対象である演技という現象を提示した後に、本論文全体の目的を説明し、先行研究との違いについて説明している。まず、類似の現象は言語学の領域においても引用研究として扱われているのに対し、会話分析の枠組みを用いることで、言語学的な引用研究では必ずしも明らかになっていない音調等の変化をも含めた演技の諸特徴を解明することができるとする。次に、会話分析を通して（1）演技が行われるときの形式的特徴とはどのようなものか、（2）演技によって達成される行為とはどのようなものか、そして（3）演技によって達成される行為によって会話の場に何が起こっているのかという問いに答えることが本論文の記述的な目的であることが説明される。さらに、これらの記述的研究を通して、社会学者であり、会話分析にも大きな影響を与えたゴフマン（Goffman）が論じた相互行為論と経験的な分析レベルを架橋することも理論的目的であることが述べられる。</p> <p>第2章ではまず、本論文で使用するデータは、会話の性質を予め決定してしまうような実験手順を踏んだものではなく、3人以上のグループ内で自然発生的に生じた会話であることを説明し、それが本研究に相応しい理由を述べている。次に、本論文の方法論的基盤として会話分析とゴフマン相互行為論を提示し、そのうち、会話分析は実際のデータを分析するための手段であることと、ゴフマン相互行為論はある現象をデータから切り出し、特定の名称で呼ぶための枠組みとして用いることを説明する。特に、ゴフマンの理論の中からフットイング（footing）、関与（involvement）、参与の枠組み（participation framework）という3つの概念を紹介し、本研究との関わりを論じている。これらの概念それぞれが3～5章の分析において中心的な問題となる。</p> <p>第3章はフットイングに関係する章である。まず形式面として、問題となるデータは演技によって発話が終了するケースと演技の後に引用助詞や主節が後続するケースに分けられることを示し、その形式の違いが発話連鎖のパターンに関連していることを論じている。すなわち、演技によって発話が終了するときには、他の参与者は「視聴者」や「共演者」として発話することが妥当な振る舞いとなるのに対し、主節が後続するときには、主節で用いられた発言動詞が他の参与者の行為を拘束するという違いがあるということである。発話連鎖のパターンが異なる理由は、発話者が自身の発話に対してどのような立場をとっているかというフットイングの観点から説明可能であり、演技で発話が終了するときには演じられた人物の言葉として発話者の行為が定位されるのに対し、主節が後続するときには発話者自身の言葉として定位されることを明らかにしている。</p> <p>第4章は関与にかかわる章であり、演技で発話が終わるときに、参与者がどのような行為を達成しているのかを分析している。演技は発話者自身の強い関心や態度を表出するものであると同時に、演技の直後に他の参与者からの反応を呼び込むことで、他の参与者の関心や態度の表出をも引き出すことを可能にする。演技によって発話者と他の参与者の双方においてこれらの機能が達成されることから、演技は態度や関心の共有を可能にする手段であることを論じている。</p> <p>第5章は参与の枠組みに関する章であり、第4章までの結論を踏まえた上で、演技が態度や関心の共有をもたらすことにより、会話の場において何が生じているのかを分析して</p>			

いる。発話者以外の参加者が会話と並行する他の活動に主たる関与を向けているとき、発話者が演技を行うことで、参加者の関与が演技に振り向けられることになる。その結果、それまで傍参加者 (side participant) であって話し手になる期待を受けていない参加者が発話者になるといった現象が生じる。誰が話して誰が話さないかという期待こそが参与の枠組みであり、参与の枠組みを組み換える振る舞いの1つとして演技を位置づけることができる結論づけている。

第6章は分析のまとめであり、第3章～第5章で明らかにしたことを整理した上で、それがゴフマン相互行為論とどのような関係にあるのかを議論している。相互行為論的な現象が具体的な会話データの中でどのような形で見出せるのかを示したこと、さらに、それを会話分析の方法で分析したことによって、経験的基盤を欠いていたゴフマンの理論を経験的な分析レベルに落とし込んだことの意義を主張している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は会話で観察される演技(enactment)という振る舞いについて、その形式的特徴、行為として達成していること、行為の結果として会話の場で生じていることの3点を明らかにし、さらに、会話分析という手段を演技という振る舞いに適用することで、ゴフマンの相互行為論に経験的基盤を与えることを目的としている。第1章で提示されるこれらの目的は明快であり、言語学的な引用研究との違いも説明されている。参照する言語学的研究をいっそう充実させることで、本研究の独創性をさらに強調することができると考えられる。

第2章では本論文で用いるデータの説明を行った後、ゴフマン相互行為論で用いられる概念のうち、第3章からの分析で必要となる3つの概念を紹介している。本論文は3人以上でなされる会話をデータとして用いている点に独創性があると言える。2人の会話であればターンが交互に交替することに不思議はないが、3人以上でなされる会話であれば、少なくとも1名は傍参与者(side participant)となる。発話者と傍参与者の関係はこれまで十分に研究されてきてはおらず、本章では、演技という振る舞いが傍参与者の行為にどのように作用しているのかという問題に取り組むための適切な分析枠組みを提示していると言える。

第3章以降が本論文における分析の中核である。まず第3章では演技の形式的特徴を対象にし、発話者が自分の発話をどのような立場のものとして捉えているかというフットィング(footing)の問題を扱っている。演技がなされたときの形式を、演技によって発話が終了するケースと演技の後に引用助詞や主節が後続するケースに分類し、これらの形式の違いが発話連鎖のパターンに違いをもたらすこと、より具体的には、演技で発話が終了するときには発話内容が演じられた人物の言葉として定位されるのに対し、引用助詞や主節が後続するときには発話者自身の言葉として定位されることを明らかにしている。本章は緻密なデータ記述に基づいて説得力のある議論が展開されていると判断することができる。その一方で、扱われているデータはフットィングの問題としてだけではなく、フレーム(frame)の問題として捉えることもできるものであり、今後、さらなる発展が見込める要素を含んだ章だと言うことができる。

第4章は関与(involverment)という概念に関わる章であり、演技という行為が会話の中で何を達成しているのかという問いを扱っている。演技で発話が終わるとき、演技は発話者自身の強い関心や態度を表出するだけではなく、演技の直後に他の参与者からの反応を呼び込む機能を果たすことを論じ、結果的に、演技によって態度や関心の共有が可能となることを明らかにしている。発話者以外の参与者の振る舞いに着目している点に新規性があるものの、演技に強い関心や態度の表出といった機能があることは先行研究でも論じられているため、些か平凡な結論ではある。しかし、演技が生じなかったときには関心や態度の共有が達成されるまでに、演技があるときと比べてより多くの発話や連鎖が必要となる点をデータにもとづいて明らかにするなど、本研究の分野に対して経験的な側面から十分な貢献をしていると判断することができる。

第5章は参与の枠組み(participation framework)に関わる章であり、演技という行為が行われた結果として会話の場で何が生じているのかという問題に取り組んでいる。一般的に、次にターンを取る参与者は現発話者に視線を向けるといった特徴的な振る舞いを示すのに対し、そのような典型的な振る舞いをしていない参与者が、演技を契機として発話者となるケースがあることを示している。つまり、演技によって参与者の関与が演技に振り向けられ、その結果として、発話者になることが期待されていなかった傍参与者が発話者になるという、参与の

枠組みが組み換えられることがあるということである。演技を受け、視線の動き等も含めて参加者がどのように振る舞うかを綿密に記述し、参加の枠組みが変動する様子を的確に説明している点が高く評価できる。

第6章では第3章～第5章の分析を手短にまとめた後、本論文がゴフマン相互行為論とどのような関係にあるのかを議論している。とりわけ、会話分析の手法を用いることで、ゴフマンが概念的に扱った事象が具体的にどのような参加者の振る舞いの中に観察されるのかを示し、ゴフマンの理論に経験的基盤を与えた点に意義があることを主張している。実際に扱っているのは演技という特定の行為だけであり、ゴフマンの提示した概念の一部に過ぎないが、個別データの緻密な記述がエスノメソドロジーの基本であるという前提に立つならば、この主張は妥当なものであり、会話分析および相互行為論の双方に貢献していると判断することができる。また、第1章で提示した3つの問いに的確に答え、理論と実際のデータを架橋することに成功している点も高く評価することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年6月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降